

Title	聖書考古学と私
Sub Title	Biblical archaeology and I
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	2005
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.73, No.4 (2005. 4) ,p.103(425)- 110(432)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	民族学考古学専攻設立二十五周年講演録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20050400-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聖書考古学と私

小川 英雄

一、ローマ帝国のオリエント宗教

ローマ帝国は古代西洋史上最後の国家であり、その最大版図は、東はユーフラテス川沿線（シリア、イラク）、北はライン川流域、西はブリタンニア（イギリス）、南は北アフリカに及んだ。

このローマ帝国の宗教は様々な宗教が存在したという意味では多神教であり、その領域内においては、ギリシア・ローマの神々の他に征服地（属州）の神を奉信する者も多かった。このような状態は紀元三一三年のコンスタンティヌス帝によるキリスト教公認後も続き、紀元三八〇年のテオドシウス帝によるキリスト教国教化でようやく終わりに近づいた。

この間にキリスト教やユダヤ教のようなパレスティナ

を故郷とする宗派は勿論のこと、他のオリエント属州、すなわち小アジア（トルコ）、エジプトなどを起源の地とする神々、またミトラスのように国外のイランからきた神も、帝国の西の果てまで布教された。逆に、帝国の西部の宗派、例えばドルイド教は土着社会の内部にとどまり、帝国内の他の地域、他の民族に広まることはなかった。

このようなオリエント（西アジア・中近東）系の宗教が優勢な原因は必ずしも明らかではないが、オリエント諸民族の宗教各派はペルシア帝国時代以来互いに友好的に接触するという経験を積んだ上、ヘレニズム時代以後は、密儀という超民族的、個人的な信仰形態をとり、地域や民族の別を超越するようになったことが考えられる。また、その背景には東高西低の経済傾斜があり、人的、

物質的にオリエントの影響力が強かったことが強調されなくてはならない。

私は学生時代から大学院生時代にかけて、ローマ帝国のオリエント宗教という、この問題に興味を持ち、この分野の第一人者とされるベルギー人フランツ・キュモン(一八六八—一九四七)の諸著作を読み始めた。その頃の私は西洋古代史を専攻する者として、考古学はまったく視野に入つて来なかつた。その原因の一つは、私の研究テーマが西洋史の中の宗教史であり、それは文献史学の研究対象であるという先入観であつた。もう一つの、より大きな理由は、キュモンの叙述法にあつた。

彼の若い頃、すなわち十九世紀末には、ローマ帝国オリエント宗教の考古資料はまだ断片的であり、その宗教遺跡の発掘は組織的には行なわれず、偶然の出土品や碑文を叙述の対象としていたので、私にはその考古学的背景は理解できなかつた。その上、キュモンのそのような考古資料の扱い方は、記述する前に完全に咀嚼してしまい、考古資料を生のまま表に出すということがなかつたのである。実際、彼の記述の中に、考古学や発掘という言葉は稀にしか出て来ない。彼の青年時代には、発掘調査の成果によつてオリエント起源のローマ時代宗教を記

述することは、まだ不可能なのであつた。

キュモンは壮年時代には、オリエント、特にシリアに現地調査を行なつたが、それは彼の学術活動の中で中心的な部分を占めてはいない。彼が実地にたずさわつたローマ帝国オリエント宗教の発掘調査は一九三四年のドゥラ・エウロポス、すなわちシリア東部のローマ時代都市におけるミトラス神殿の発掘調査であつたが、それは彼自身の発見や発掘になるものではなく、発掘調査団長のM・I・ロストフツェフから招かれて出土状況を実地に見聞したに過ぎなかつた。そしてその見聞をまとめた彼の研究(或いは報告書)は長い間埋れたままであり、ようやく慶応の民族学考古学専攻が生まれる直前の一九七五年、彼の死後二八年も経た後に刊行された⁽¹⁾。従つて、若い頃の私が入門書としてキュモンの著作をいくら読んでも、考古学という学問に出会うことは不可能であつた。

二、考古学の発見

それでは私はどのようにして考古学に入門したのであろうか。

第一に挙げなくてはならないのは、キュモンの次の世

代の手になるこの分野の著作物には、ローマ帝国内で発見されたオリエント系の宗教が、生のままの考古資料として出ることが多くなったという事実である。これはキユモンの著作では決して見られないことであった。

キユモンとその次の世代の学者たちの間に見られるこの違いは、彼の代表的後継者M・J・フェルマースレン(一九一八—一九八五)の諸著を読めば明らかである。⁽²⁾

彼はキユモンのミトラス教資料集⁽³⁾から約半世紀後に、新たに資料集⁽⁴⁾を編纂し、それ以後のミトラス教研究の基礎を置いたが、そこでははつきりと考古資料を表に出しており、それ以後のミトラス教研究は考古学の基礎的知識がなければ、正確に理解することは不可能であった。

フェルマースレン自身の経歴を見ても、そのことは明らかである。彼自身ローマを始めイタリア各地のミトラス神殿遺跡で、実地に発掘調査を行なった。とりわけ、ローマ市アウエティヌス丘上のサンタ・プリスカ教会地下で発見されたミトラス神殿の発掘は最も有名であり、その大部な発掘調査報告書⁽⁵⁾は三田の図書館にも収められている。

キユモンとフェルマースレンの方法論の違い、すなわち、考古学を前面に出すかどうか、また考古資料自体の

増大にいかに対処するかという問題点は、両者のミトラス教概説⁽⁶⁾を読んでみれば明らかである。

このようなわけで、私はまず近森正、鈴木公雄両先生の御好意によって、茨城県上高津貝塚の発掘調査に参加させてもらい、考古学の何たるかを理解するように努めた。

次にローマ帝国に広まったオリエント宗教の考古学的研究を進めるには、今後どうすればよいかという問題に直面した。当時の私は、ローマ帝国オリエント宗教の起源の地としてのオリエントの考古学と、オリエント宗教が広まったギリシア・ローマ世界の考古学の区別がつかなかった。実は、前者は後述するように、比較的最近になって発達したものである⁽⁷⁾のに対して、後者は古典考古学と云い、ルネサンス時代に起源をさかのぼることができ⁽⁸⁾る。

私はまずオリエント考古学を学ぶために、ロンドン大考古学研究所⁽⁹⁾の中近東学部に留学した。そこでパレスティナ考古学を中心としてオリエント考古学を学んだのであったが、冒頭で述べたように、イギリスはローマ帝国の属州の一つブリタンニアでもあったので、ロンドンのシテイの他イングランドやウェールズにローマ時代遺

跡があつた。私は休暇を利用して、これ等のいわば古典考古学の遺跡を見て歩いた。当時、そこは発掘が進行中のオリエント宗教遺跡ではなかったが、ミトラス教の神殿遺跡を見て、驚きを禁じ得なかつた。ロンドンのシテイのウォルブルックやハドリアヌスの城壁沿いのカローバラやハウステツズなどのミトラス神殿について調べてみると、古代イギリスのミトラス教は、専ら考古学のみによつて解明されて来たという事実が分かつた。しかし、ブリタンニアの古典考古学に参加する機会はなく、代わりにウェルズ地方北西端のバンゴル近郊(シヤンデガイ)の環状遺構の発掘に参加し、新石器時代イギリスの考古学の実際を知ることができた。

次にオランダのフェルマースレン教授の下に留学したが、先生はユトレヒト大学考古学研究所に属しており、私は古典語の学習を含めて、古典考古学としてのローマ帝国オリエント宗教を専攻することができた。そこで私はキュモン以来のこの分野で、三代目の末席に加わることができた。私は教授の下でミトラス教ばかりでなく、小アジア起源のキュベレとアッティスについても知識を得ることができた。⁽¹⁰⁾

他方、日本では当時、オリエント考古学について新し

い動きが起こっていた。一九五四年に三笠宮殿下を中心にして、日本オリエント学会が結成され、すでに一〇年余の時間が経過し、やがて殿下を含めてオリエント発掘の気運が盛り上がっていた。オリエントではすでに一九五六年以後、東京大学のイラン・イラク調査団が発掘活動をしてきたが、それに対して日本オリエント学会は発掘対象をイスラエル中部のテル・ゼロールとした。⁽¹¹⁾これは私のような慶應出身者がオリエントでの発掘調査に加わる最初のチャンスであつた。

当時、日本オリエント学会の古代オリエント関係の幹部の大多数は、各大学の西洋史系の学者に占められており、西洋文明の起源の土地での発掘調査という考え方が大勢であつた。三笠宮殿下の会長としての御活動もそのような立場に立つものであつた。この傾向は、ローマ帝国のオリエント宗教という私の研究課題とも一致しているように思われたのであつた。

しかし、私にとってイスラエルはまだ未知の土地であり、そこでローマ帝国のオリエント宗教にかかわる発掘調査活動ができるかどうかは、不明のままであつた。その後、イスラエルではカエサレア・マリテューマ(ケサレア)でミトラス神殿が発見されているとは云え、テ

ル・ゼロールの発掘調査が行なわれた一九六〇年代中葉のイスラエルでは、そのような研究テーマを持つ者にとって好都合な考古学的状況は考えられなかった。しかし、当時の私にとっては、オリエント宗教の起源の地で発掘調査を経験するということはこれ以外には考えられなかった。当時は海外渡航制限や円安のレートのため、民間學術団体による海外での発掘調査には多くの困難があり、現在のようになんか選択は不可能であった。従って、私は自分自身の問題意識は一応棚上げて、イスラエルでの発掘調査、すなわち聖書考古学に深入りすることになったのである。私はイスラエルの考古学者たちの御好意によって、テル・ゼロール以外の遺跡（テル・カシーレやテル・アフエック）でも掘る経験を重ねることができた。

以上が二五年前に民族学考古学専攻が成立した時までの私の考古学の面での経歴であり、そのころすでに私は四〇才台のなかばにさしかかっていた。

いすれにせよ、我が国の聖書考古学の伝統は、このようにしてまずテル・ゼロールに始まり、最近のガリラヤ湖畔のエン・ゲブまで続いている。

三、聖書考古学とピトリ

聖書考古学はパレスティナ考古学とも呼ばれるが、それが聖書の名を冠されるのは、第一にそれがユダヤ教やキリスト教の聖書の主要な舞台となった土地の発掘調査であるからであり、第二に発掘調査が聖書の中の歴史記述や社会と密接な関係を持つことがあるからである。

私はこのようにして聖書考古学に深入りしたが、テル・ゼロールやエン・ゲブの発掘調査では、ローマ帝国に流入したオリエント宗教という私のテーマと直接かわるような遺構や遺物には行き当たらなかった。しかし、古代オリエントの歴史と文化について、より明瞭な手がかりが得られた。その第一は、これ等の遺跡は遺跡丘（遺丘）、マウンド（英語）、テル（現地語）などと呼ばれるものであり、古代都市が時代毎に積み重なって形成されたものであるということである。ここでは古代オリエント文明の拠点であった都市が廃墟となつて小山を作っているのであり、このタイプの遺跡はメソポタミア（イラク）、アナトリア（トルコ）、シリアなどでも広く分布している。従つて、たとえテル・ゼロールやエン・ゲブのような小型のものであつても、それを実際に掘る

ことよって、古代オリエントの文化と歴史の実態を知ることができるのである。

私はこのようにして、オリエント宗教の社会的、文化的背景を理解する道が開かれたと自負している。

オリエントで遺跡丘の構造を最初に明らかにしたのは、ハインリヒ・シュリーマンであった。彼は一八七〇年にトルコ北西部の遺跡丘ヒサルリツク、すなわちトロイを発掘し、それが九層から成る都市の積み重なりであることを明らかにした。しかし、彼は未だ土器の編年について無知であったので、それぞれの層に正しい年代を与えることはできなかつた。

それに対して、その二〇年後の一八九〇年に南パレスティナのテル・エル・ヘシを発掘したフリンダーズ・ピトリーは各層の土器に着目して、積み重なっている幾つもの都市の遺構に大よその年代を与えることができた。⁽¹²⁾

このように、オリエント考古学の代表的タイプの遺跡であるマウンドの科学的発掘法が初めて達成されたのは、聖書考古学の世界においてであった。従って、歴史的に見ても、聖書考古学はオリエントの他の地域の考古学を先駆するものであると云うことができる。

聖書考古学が私に与えてくれたもう一つの手がかりは、

それが聖書の中に記された歴史や社会の中からユダヤ教とキリスト教が出現したという点である。これは一見自明なことのように思われるが、発掘調査の成果とこれ等の宗教の出現や成長の実態とは簡単に結びつくものではない。私は自らの発掘調査活動やその成果によつては、これ等のユニークな一神教に行きつかなかつた。私がユダヤ教とキリスト教がローマ帝国のオリエント宗教の一部をなしたということに気がついたのは、発掘のためにパレスティナに滞在したという体験そのものからであつた。

一神教は古代オリエントの他の地域でも見られる。エジプト王アクナトン（紀元前一三六四—一三四七）やイランのゾロアスター（年代不詳）の信仰がそれであり、後者はイランのヤズドやインドのボンベイとグゼラトなどに今なお生き残っている。しかし、アクナトンの思想もゾロアスターの教えも、ローマ帝国には行きつくことがなかつた。それに対して、ユダヤ教とキリスト教はローマ帝国のオリエント宗教として広まったばかりでなく、ローマ帝国の滅亡を越えて生き延びたのであつた。私はイスラエルに行つて、初めてその点を痛感し、シナゴーグなどのユダヤ教施設やキリストゆかりの土地や建物を

見て歩いた。

注意しなくてはならないのは、キュモン以来、ローマ帝国のオリエント宗教という場合、ユダヤ教とキリスト教は除外されて来た、ということである。キュモンやフェルマースレンの諸著を読んでも、パレスティナ起源のこれ等二派には行き当たることがない。一九世紀から、ユダヤ教とキリスト教を除外した諸宗派を一括して「異教」と呼び、それが一つの独立した研究領域をなして来たのである。「異教」は英語ではペイガニズム (paganism) であるが、この語源はラテン語のパグス (pagus)、『すなわち「百姓」「田舎者」に由来し、なかなかキリスト教に改宗しなかった地方民を指してキリスト教徒が使った差別用語である。

従って、最近では欧米の研究者もペイガニズムやそれに類する呼び名を避けるようになって来たし、また、キュモン以来の伝統に反して、ユダヤ教とキリスト教を他の諸宗派と併記して一書とする者も現れている⁽¹³⁾。このような最近の傾向を考えると、これ等二つの一神教の背景としてのパレスティナの土地で、聖書考古学の発掘に従事したことは、ローマ帝国のオリエント宗教の一研究者として幸いなことであつたと思われてならない。

考古学に無知であつた私は、このようにして、オリエントの遺跡丘の発掘、更には日本やイギリスでの発掘によって考古学の基礎を学ぶことができ、その上に立つて、ローマ帝国のオリエント宗教の研究を進めることができるようになった。

註

- (1) cf. F. Cumont, *The Dura Mithraeum, Mithraic Studies*, vol. I, Manchester, 1975, pp. 151-214.
- (2) このオランダ人学者の名前は、オランダ語の教科書に従えばフェルマーゼンであるが、私が彼自身やその周囲の人々の発音を直接聞いたところでは、セハセトスの中間くらいに聞こえたので、私は敢えてフェルマーゼンとした。
- (3) *Textes et monuments figurés relatifs aux mystères de Mithra*, Brussels, 2 vols., 1896-1899.
- (4) M. J. Vermaseren, *Corpus Inscriptionum et Monumentorum Religionis Mithriacae*, The Hague, 2 vols., 1956-1960.
- (5) M. J. Vermaseren and C. C. van Essen, *The Excavations in the Mithraeum of the Church of Santa Prisca in Rome*, Leiden, 1965.
- (6) F. キュモン (小川訳)「ミトラの密儀」平凡社、一九九三、及び M. J. フェルマーゼン (小川訳)「ミトラ

ス教」山本書店、一九七三。

(7) ほぼ、キュモンと同時代。

(8) Cf. J. Colin, *Cyriaque d'Ancone, humaniste, grand voyageur et fondateur de la science archéologique*, Paris, 1980. キリアクス(一三九二—一四五二)はトルコ西岸のギリシア都市に対しても表面調査を行っている。

(9) 現在はユニヴァーシティ・カレッジに所属。

(10) M・J・フェルマースレン(小川訳)「キュベレとアッティス—その神話と祭儀」新地書房、一九八六参照。

(11) テル。ゼロールの発掘については、小川「イスラエル考古学研究」山本書店、一九八九。また、小川「三笠宮殿下とテル・ゼロール」オリエント、四六一—二、二〇〇四、一一六頁参照。

(12) Cf. W. M. Petrie, *Tell el Hesj(Lachish)*, London, 1891.

(13) 例として、A. Tripolitis, *Religions of the Hellenistic-Roman Age*, Grand Rapids, 2002. 二〇〇二年秋に刊行された拙著「ローマ帝国の神々—光はオリエントより」中公新書、中央公論新社もその線に沿ったものである。